TBS落語研究会　２０２４年２月２９日(木)（第６６８回）
新・落語掌事典

田中優子

●与太郎（道具屋）

与太郎を調べると「でたらめ、嘘つき、ボンクラ、たわけ、うすのろ、間抜け」など類似の形容詞が満載だ。これは「生産性」などというものに価値を置く、狭い人間観を持つ者が書いたのだろう。落語における与太郎の人格設定は、江戸時代特有の多様な人間観に由来する。主体性がないように見えるが一徹（頑固）であり、罵倒されても決して感情むき出しの暴力沙汰にはならない。馬鹿げたプライドを持たないのだ。近現代人とは全く違う世界を生きているかのようだ。現代人の多くは、手段でしかない金銭を生きる目的にしている。金銭の獲得能力を他者と比較し、他者の評価も気にする。その類のストレスは外圧だと思っていると、落とし穴にはまる。実は内面にこそ自分を責める根源があるのだ。与太郎はその類のことは意に介さず、自分自身であり続ける。見習うべき人間像だ。

●知ったかぶり（千早ふる）

「隠居」は、自由意志で仕事や世間での立場から退き、家督を譲り世の中から遠ざかって暮らす人のことだ。江戸時代の隠居は年齢と関わりなく、家制度から外れた人間を意味する。また小伝馬町の牢屋内では、囚人達の間で決めた役割の名称としても使われた。牢内役人を退いた者という意味で、上座の隠居、若隠居、隠居、隅の隠居などと呼んでいたのである。隠居は、与太郎と同様に多くの演目に登場する落語の登場人物でもある。博学で、主に場のまとめ役として描かれる。役割が振り当てられてしまうと、そこから逃れるのは容易ではない。物知りを自認する隠居となると、知らないことをさも知っているかのごとく振るまい、こじつけでその場を凌ぐ。高慢で知ったかぶりで偉そうだ。こういう人間を笑いの種にして、聴衆が溜飲を下げる一役を担うのも、落語の本懐だろう。

●啖呵（棒鱈）

啖呵は痰火とも書く。痰は火の病と言われ、咳を伴って激しく痰が出る病のことである。この病が治癒することを、胸がすっきりするところから「痰火を切る」といった。これとは別に「啖呵を切る」は「口上を言う、喋る」という香具師の隠語でもあった。この場合は聴衆に言葉を挟ませず、考える間を与えないテクニックだ。仏教用語にも発音と意味が類似した「弾呵」がある。弾呵は、叱り咎める、非難するという意で大乗仏教の立場から小乗の教えに留まるものを叱咤した言葉だ。江戸っ子の啖呵は「胸の空くような歯切れの良い口調で、威勢がいい言葉をまくし立てる」ことだから、前記三例と共通点がある。この演目は、地方訛りの田舎侍に江戸っ子が啖呵を切る場面が見せ場のひとつだ。地方の人々が集まる江戸の特徴も背景にある。上方にはない江戸落語の代表作とも言える。

●ケチ（味噌蔵）

ケチは吝嗇とも書く。吝は物惜しみをすることで、嗇は農作物を収蔵する穀物蔵のことだ。西川如見の『町人嚢』には「吝は私欲より出、倹約は天理より出」とある。吝は「ひかえる」や「倹約」とは一線を画す分かち合わない精神を指す。それゆえに辞書を調べてみても「むさぼる」や「うらむ」などの意も書かれている。江戸時代は公共事業が少ない。多くの庶民の生活に役立つ架橋工事などは、商いで利益を上げた大店が資金を調達した。世間の評判を意識した下心も皆無ではないだろう。しかし根底には、利益だけの追求とは異なる別の価値観が見えてくる。儲けること自体を罪悪と考え、分かち合うことによって、その罪悪感を払拭できると考えていたのだ。ケチの語源としては「ケシ（怪事）の音転」や「弓を射て勝負を定むるケチ（結）」が考えられているが確かではない。

●一つ家（鰍沢）

一つ家は、人里離れた山野などにポツンと一軒だけある家のことだ。それだけで、何か曰く因縁がありそうである。古くからそこを舞台とした物語がつくられ、それらを「一つ家説話」と総称している。人を喰らう鬼婆の伝説ともいわれる能の『黒塚』は、その代表作であろう。『鰍沢』は、三遊亭円朝の三題噺と言われてきた。幕末に盛んだった「三題噺の会」で、円朝が「小室山の御封」「玉子酒」「鉄砲」を出されて作ったと。しかし同じ会で河竹黙阿弥に「玉子酒」「筏」「熊膏薬」が出題されたことも、資料でわかっている。今のところの結論としては、「粋狂連」という三題噺の会に属した河竹黙阿弥が創り、それを譲られた円朝が芝居咄にした、とされている。河竹黙阿弥には『糸時雨越路一諷』という、『鰍沢』によく似た芝居の演目もある。